

Essay

Sapiarc.com

2015年5月10日(2015-5)

「世界は一冊の本」

今日午後の読売ニュース速報とNHKニュース速報で、詩人長田弘(おさだ・ひろし)氏が今月3日に胆管がんのために亡くなったことを知った。75歳だったそうだから、私よりも3歳年下だったわけだ。

私は、詩は余り読んでいない。難解なものが多いからだ。しかし、長田氏の詩は、わかり易い言葉で本当のことを書いているという感じを持っている。詩集というものは、単行本で出版されたもので読むべきだと思う。文字の置き方や装丁などにも意味があるはずだからだ。私は、長田氏著の「世界は一冊の本」を取り出して、読んでみた。この本は1994年に晶文社から出版された初版本で、2010年に[definitive edition]と称するものが出たようだが、そちらはもっていない。

この本の最後に置かれている詩の題が「世界は一冊の本」だ。かなり長いものなので、そのなかの一部を次のページに書いておこう。

最近の私は、世界の動き、人々がしていることなどを読むのに疲れを覚え始めている。そういうことを読むとストレスを感じるようになったと言ってもよい。今の私にはどうにもできないことばかりだからだ。それで、私は、自分の本来の研究生活にこもって、分子が発する言葉を読むことに多くの時間を使うようになっている。

分子はスペクトルという暗号の形で、自分のことを語っている。それを読むのが、私の専門

だ。一年ほど前に、その時点での最高速度で計算をすることができるデスクトップパソコンを特注で買い、日夜それを使って、分子が語っていることを読もうとしている。ときには何日も何日もぶっ通しで計算をする。現在のものより少なくとも百倍速いコンピューターを使ってみたいが、こちらが活着している間にそういうことができるかどうかはわからない。

ときには、ああこれで、この分子が語っていることがようやく読めたなと思えることがある。まだ本当のことが読めていないのではないかと思うことも多いが、いずれ何とかなるだろうという予想があるので、余り強いストレスにはならない。

長田弘氏は、別の詩のなかで、「ゆっくりと生きなくてはいけない。」と書いている。しかし、私は急いでいる。私に残されている時間がどれだけあるかわからないからだ。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。

書かれた文字だけが本ではない。
日の光り、星の輝き、鳥の声、
川の音だって、本なのだ。

ブナの林の静けさも、
ハナミズキの白い花々も、
おおきな孤独なケヤキの木も、本だ。

本でないものはない。
世界というのは開かれた本で、
その本は見えない言葉で書かれている。

人生という本を、人は胸に抱いている。
一個の人間は一冊の本なのだ。
記憶をなくした老人の表情も、本だ。

200億光年のなかの小さな星。
どんなことでもない。生きるとは、
考えることができるということだ。

本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。



(おわり)